〈原　著〉

近 畿 福 祉 大 学 紀 要
J. kinki welf
Vol. 3（1）47～57（2002）

The *Ancrene Wisse*，第四章，Temptation−‘Uttre temptatiun’：説教の語り口，修辞法，構成法等に言及した試論（第３編）

貝　原　洋　二

The *Ancrene Wisse* 4. Temptation−‘Uttre temptatiun’： An Essay on Speech, Rhetoric and Composition of his Preaching (3rd series)

Yoji KAIHARA

The aim of this present paper is to describe how the author deals with the Seven Deadly Sins in the above title, especially, from the view point of the inner sins or inner temptations whose strength is too great and effective and cunning to find their attack without delay, comparing them with the outer ones treated in the same preceding papers as this. The ways in which the author deals with them are fairly possible to understand through reading the text repeatedly and carefully, with the help of the dictionaries of which is The Middle English Dictionary pubulished, since 1956, in the University of Michigan Press most useful and available.

The author argues the inner temptations, chiefly composed of the rhetorical and colloquial expressions, ‘Þe liun of prude’,‘Þe neddre of attri onde’, for example. The parts treated in this paper contain lots of difficult sentences in senses and syntactically, above all in word meanings in the textual contexts and a number of words which are already obsolete or archaic.

Key words：Seven Deadly Sins，七大原罪
Inner Temptation，内的誘惑
Pride　傲慢心
Lechery　性的淫乱

１．

今回書いた小論は前々回と前回書いた一連の論考の続篇の形で作成されている。その本文は全て『近畿福祉大学紀要』第１巻，第１号の31頁から40頁と同紀要第２巻第１号の34頁から41頁に亘って載せられた。今回の小論は前回並に前々回のそれにテキストの頁を追っての続きの論考として綴られている。筆者が何の様な意図，目的，考え方，計画に基づいてこの一連の試論を書き続けているかは上記紀要の第１巻の冒頭にその概略が示されているが，改めてこの場に於いて要点のみを繰り返して述べると，上記作品『尼僧の戒律』（The *Ancrene Wisse*, c. 1230）の原作品を筆者なりに精読を繰り返し，その長年の読みを通してそこに盛られた内容を説教の形をとった宗教的文学作品として考え，説教者がその作品の中で説く趣意をその説教者の説教の仕方，方法の中で捉え，その言，スピーチを分析する事によって説教者が自らの説教の目的，意図を言語表現的に如何なる説教方法に基づいて説教をしているかを試論的に考察しようとしたものである。

受付　平成14年10月17日，受理　平成14年11月10日
近畿福祉大学　〒679-2217　兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5

2.

今回の小論で考察したテキストの範囲は前回のそれの続篇２とし，それに引き続いて為される説教のまとまった趣意の全体をカヴァーし，従って前回が94：20－99：18の外的誘惑（Uttre temptatiun or fondunge）の説教であったのに続いて99：19－109：14）が１つのまとまりを持った説教の１つの段落と解してその範囲を論じた，上述の如く前回の小論が外的誘惑を扱かった説教であるのに対し，今回のそれは内的誘惑（Inre fondunge）を扱っている。外的誘惑の説教の趣意を踏まえての連続の説教の中で内的誘惑では何の様な内容に於いて如何なる説教手法が採られているかをそのスピーチから以下に於いて見て行くに際し予め同紀要，第２巻の２を参考にして頂くと分かり易い。

内的誘惑に就いての説教はこの第四章に於いて‘Inre fondunges beoð misliche unþeawes. oðer ... of þe world. of ure flesch oðerhwile... ‘To þe inre is neod wisdom ȝ gasteliche strengðe.’（94：10－16）と説いている。ここから説教者の説教は，‘We schulen nu speoken of þe uttre. ȝ... þ is eine aȝeines hire to frourin ham seoluen.’（94：16－19）と言って外的誘惑に就いてのそれが続き，‘ Alle þe ilke fondunges þe we beoð nu ibeaten wiðꝑ þuncheð wopꝑ nawt wunne. ah ha wendeð efterward to weole ȝ to eche blisse.’（99：18）で終る。約２万語以上に亘る長い説教である。ここまでは前に記した様に同紀要の第一巻と第二巻に於いて論考されている。

今号の論考はそれに引き続いて為される内的誘惑に関する説教ではあるが説教者はこの内的誘惑の方は，外的誘惑の方にはそれに対抗して行く為には忍耐（patience þ is þolemodnesse）が必要であると説くが，内的誘惑に対しては智恵と精神的強さ（wisdom ȝ gasteliche strengðe）が必要であると要点を述べている（94：14－16）。もう一つの内的誘惑の特徴として上述した如く，外的誘惑の方が騙され易く，誤解し易い（Þis dale of þis temptatiun þ is uttre icleopetꝑ is swikelure þen þe oðer half.）（93：27－８）と言っている事は内的の方が騙される怖れは少ないと言う事になる。

3.

説教の内容，主題別の区分はテキストに従って以下の様に区分して，これ迄同様に論じて行きたい。

最初の説教段落は（99：19－100：５）迄とする。そこでは説教者はこの内的誘惑についても外的誘惑と同じ様に下位区分して説教を進めている（99：19－24）。では外的誘惑の場合を復習しておいてから，内的誘惑の場合も大きく２つに分類し１つを肉体的な内的誘惑（fleschlich fondunge），あと１つを精神的誘惑（gastelich fondunge）としている。そして外的の場合と同様その具体的な場合として‘ fleschlich； as of leccherie. of glutunie. of slawðe. ’と説き，‘ Gastelichꝑas of prnde of onde. ȝ of wreaððe. alswa of ȝiscunge, ’と言う。ここで説教者は，それ等内的誘惑を七大原罪であり且つその不正な子供達であると述べている（þus beoð þe inre fondunges þe seouen heaued sunnen ȝ hare fule cundles.）更に肉的内的誘惑を足の傷（fot wunde）に喩え，精神的誘惑の方はそれが他方よりはより恐ろしい（mare dred of.）と言ってから胸の傷（breost wunde.）に喩えている。更にその各々に就いての説教では，にも拘らず我々は内的肉体的誘惑の方が感じ易いだけに，ついその方を重大視する。内的精神的誘惑も屢々もっているがそれに気づかず神の目には偉大で恐るべきものと説く。ここに於いても説教者は肉体的誘惑よりは精神的誘惑の方へ力点をより置いてその恐ろしさを力説した説教を為している。その理由として一方は気づき易いから直ぐ医師とかに救済を求められるが，他方，内的精神的誘惑の方は痛みを伴わないだけにそれらを告白で以っても又忍耐で以っても救済し得ず少しでも気づく前に人を全て死へ引っ張り込んでしまう，と説いている。ここでは内的誘惑を外的誘惑と較べながらその併行的関係の元で両者の具体的対照性の中で分り易い喩えと表現で以ってこの誘惑の概要を述べている事が分かる。

4.

次の説教の段落をテキストに従って区分すると（100：６－101：17）が第二の段落となる。始めに説教者はこの説教のポイントである説教から入る。‘ Hali men ȝ wummen beoð of alle fondunges swiðest ofte itemptet ȝ ham to goderheare. ’その理由としてそれを更に具体的に分析，‘ þurh þe feht toȝeines hamꝑ ha biȝeoteð þe blisfule kempene crune. ’の説教文がそれに当る。その根拠として説教者はエレミヤの場合を引用，‘ lo þah hu ha meaneð ham i Ieremie, Persecutores nostri uelociores... in deserto insidiati sunt nobis. ’これは直後に翻案されて‘ þ is, Vre wiðeriwines swiftre þen earnes up o þe hulles... ȝ ȝet i þe wildernesse ha spieden us to sleanne. ’と略々素直ながらより具体的，解説的で聞き手に理解し易い訳文に増幅されている。つまり一種の解釈的訳文として分析されている。説教者は拉典語原文の主語（主題）‘ Persecutores nostri uelociores ’を

‘ Vre wiðeriwines swiftre ’ と具体的に分かり易く翻訳し，‘ super montes persecuti sunt nos. ’‘ ha clumben efter us. ȝ þer fuhten wið us. ’ と同様により感覚的に把握，理解し易い表現として表わしている。そして次の荒野にあってはどうかと言う原文 ‘ in deserto insidiati sunt nobis. ’ は ‘ ȝ ȝet i þe wildernesse ha spieden us to sleanne. ’ とこれ迄同様よりリアルな解説的表現で翻訳している。次に説教はその主題である ‘ Vre wiðeriwines ’ に就いて説く．説教者は始にそれには三者があって ‘ þe feond. þe worlt. ure ahne flesch ’，それ等はお互い助け合って働きかけるので時に何れの悪が働きかけているのか分かりにくい，‘ as ich ear seide. lihtliche ne mei me nawt... for euch helpeð oþer. ’ と説く。しかしそうは言ってもその各々の三つの悪魔にはそれぞれその働きかける役割分担が有って，それは次の様であると，その三者の持ち分に就いて次の様に説教をしている。‘ þah þe feond proprement eggeð to atternesse. as to prude... þe her efter beoð inempnet. ’，‘ Þe flesch sput proprement toward swetnesse. eise ȝ softnesse. ’，‘ Þe world bit mon ȝiscin worldes weole ȝ... cang men to luuien a schadewe. ’ この説教の表現は具体的，個別的で各々の ‘ wiðerwines ’ の働らきが明確化されている。特に ‘ feond ’ に就いてはより具体的に ‘ as ’ 以下で述べられている。次に荒野に於いて我々を待ち伏せて加害を行う件々の説教がなされる（þeos wiðerwines hit seið... þer þe deoflesasawz ofte beoð strengest.）。悪魔は我々を丘の上にまで追ってくる。荒野で待ち伏せをして如何に我々を攻めるかを謀る。丘は高い生活の場所であり，そう言う所では悪魔の攻撃は最も強いと説く。説教はその次の主題へ進んで次の様な説教になる。‘ Wildernesse is anlichi lif of... alle wilde beastes ant... for of all flesches is wilde deores flesches leouest ȝ swetest. ’ これは拉典語原文には無かった内容と推測する。始めに ‘ Wildernesse is anlich lif of ancre wununge. ’ と説教の要点を述べる。その理由として説教者は ‘ for alswa as i wildernes beoð alle wilde beastes ant... for of all flesches is wilde deores fleschs leouest ȝ swetest. ’ と言う。つまり ‘ alswa as i wildernes beoð alle wilde beastes ant... ah fleoð hwen ha heom iherð: ’と日常の経験を直喩の形にして，‘ alswa schulen anrcres ouer alle oþre wummen beo... ȝ swetest him þunche ð ham. ’ の文章で鮮やかに尼僧の荒野での生活も亦，自然の中の野の獣の様にあるべきである。そうする事にとって彼女等は他の者以上に主に愛され彼によって彼女等が最も甘美に思われるから，と説く。そして更にその根拠として，‘ for of all flesches is wilde deores fleschs leouest ȝ swetest. ’ と結んでいる。説教はこの様な説明をした後に，‘ Bi þis wildernesse wende ure lauerdes folk as... þ he ham hefde bihaten. ’ 前述の尼僧等は神に愛され，甘美に思われる，の表現はここでは，我々，神の人々はエルサレムと言う幸せの土地に赴く，と表現され，まとめられる。ここで説明，解説的説教は終る。次はその事の実践を勧める文章となり，この段落は終了する。‘ Ant ȝe mine leoue sustren wendeð... þ he haueð bihaten his icorene. ’の前半と‘ gað þah fulwarliche. for... Her beoð nu o rawe itald þe seouen heaued sunnen. ’ と言う後半部より成る。勿論内容的には後半の説教が遙かに重要な内容を有っている。‘ for i þis wildernesse beoð uuele beastes monie... Her beoð nu o rawe itald þe seouen heaued sunnen. ’はその中心的主題でそれは次の説教の主題の始まりでもある。

５．

上述の ‘ þe seouen heaued sunnen ’ の中の最初の悪の獣は ‘ Þe liun of prude ’ が挙げられる。説教者は，「Þe liun of prnde haueð swiðe monie hwelpes ant ich chulle nempni summe. ’ と言って以下に於いてこの主題の中で最も多くの説教をしている（101：18−103：20）。約延べ語数にして800語位とみられる。他は大体その半分かそれ以下の語数である。以下に於いてその子供（hwelpes）に就いて一つ一つを挙げてその各々について，解説的語り口で説教をしている。全部で10の悪徳が挙げられる。初めの ‘ Vana gloria ’ は ‘ þ is hwa se let wel of ei þing þ... mispaiet ȝef ha nis itald swnch as ha walde. ’ の説教の文章である。空虚な名誉心の本質を簡潔にまとめた説教文は自分の言動に就いて実力以上の高い良い評価を得たいと思う考えとか意志，その様な評価を得られないならば相手を非難したり怒る，その様な態度を ‘ gold ring i suhe nease. acointance i religiun. wa deð hit ofte. ’ と喩えて価値の低いものとしている。次に第二番目に挙げられる虚栄の子は ‘ indignatio ’ である。その説教の文章は ‘ An oþer is indignatio. þ is þe...ȝ forhoheð chastiement. oþer ei lahres lare. ’ と簡潔に述べ，第三のそれは‘ Þe þridde hwelp is ypocresis þe makeð hire betere þen ha is. ’ と更に尚簡潔にまとめ，第四番目の子供は，Þe feorðe is presumtio. Þe nimeð mare on hand þen...ȝ mei beon itemptet. ’ 具体的，例示的に要約する。第五番目の子供は，‘ inobedience ’ と呼ばれ ‘ nawt ane þe ne buheð. oðer... Euch lahre his herre. ’ 具体的かつ分かり易く，どう言う目上の人々に対して頭を下げないかを殊更に挙げている。第六番目の子供は ‘ loquacite ’ を挙げて

いる。‘ Þe seste is loquacite þe fedeð þis hwelp þe... chideð fikeleð. stureð lahtre. ’ ここでも ‘ loquacite ’ とはどんなおしゃべりを言うのかそのケースを具体的に簡潔にその喋り方を示す語を掲げている。第七番目の子供は ‘ blasphemie ’ を取り挙げている。‘ Þe Seoueðe is blasphemie. þis hwelpes nurrice is... for ei þing þ he þoleð. sið oðer hereð. ’ 此処でも ‘ blasphemie ’ とは何んな口のきき方を言うかを解説した説教文となっている。第八番目の子供は‘ inpatience ’である。‘ Þe eahtuðe is inpatience. þis hwelp fet þe nis þolemod aȝein alle wohes ȝ in alle uueles. ’ 極めて簡潔な要約で終る。次の第九番目の子供は ‘ contumace ’ である。‘ Þe Niheðe is contumace. ant þis fet hwa... ne mei bringen hire ut of hire riote. ’ この解説も簡潔ではあるが要点‘ beo hit god beo hit uuel. þ... bringen hire ut of. hire riote. ’ はこれ迄同様，正確に説かれている。第十番目の子供は ‘ Contentio ’である。‘ þe teoheðe is Contentio. þ is strif to ouercumen þ te oþer þunche underneoðen... ȝ to alle his halhen: þen ei rotet dogge. ’ 以下の解釈には不明な部分が多かったので誤解の悛れもある。）‘ þe teoheðe is Contentio þ... þe haueð biȝete þe place. ’, ‘ I þis unþeaw is up brud.ȝ... þe wes biuore ȝare amendet ’, ‘ Her imong beoð oðerhwiles... ȝ prude wordes wið warinesses ȝ bileasunges. ’,‘ Her to falleð euenunge of ham seolf... oðer of dede. ’,‘ Þis is among nunnen. ȝ gað... oðer biddeð him priuee bonen. ’, ‘ Me þinges amansede nuten haþ... ’, ‘ þen ei rotet dogge. ’ にその中が意味上区分されているよう，ここでは他人の落度を実際以上に非難することから，自己満足と喜び，快感を得る，その反美徳性を説いていると解釈される。‘ Þe ealleofte hwelp is ifed wið... : haueð þe liun of prude. ’ は全てこの様な ‘ onde ’ から生まれて来る子は何の様な悪徳の源から発していて，それが外見上，始めは美徳の様相をもっていても，やがてはそれが次第に傲慢へと育ち変って行くことを具体的，比喩的単語を多く用いて説得的に説いた内容の説教と推察される。

6.

第二番目に説かれる ‘ uuele beastes monie ’ の一匹は ‘ Neddre of attri onde ’ である。この獣について始めに説教者は次の様に始めている ‘ Þe neddre of attri onde haueð seoue hwelpes. ’ と言って，‘ Ingratitudo ’ を挙げている。この悪徳に対して以下の様に説いている。‘ þis cundel bret hwa se... ȝ meast aȝein his grace. ’ 先ず最初に ‘ þis cundel bret hwa se... oðer forȝet mid alle. ’ とその本質，本性を述べた後に，その説教の基調語について，‘ goddede ich segge nawt ane þ... ȝef ha hire wel biþohte. ’ と解説する。最後に ‘ Of þis unþeaw me nimeð to... ȝ meast aȝein his grace. ’ と結論づけている。この悪徳に人々が気づいていない事が最も神にとって忌み嫌うべきもので，神の恩寵に反するものである，と説いている。第二匹目の子供は，‘ Rancor siue odium ’ である。‘ Þe oðer cundel is Rancor siue odium. þ... þ he eauer wurcheð. ’ この子供に就いては簡単な説教で終えている。第三番目の子供は，‘ Þe þridde cundel is ofþunchunge of oþres god. ’ と説いているだけである。第四番目の子供も。‘ Þe feorðe: gleadschipe of his unel. ’ とあるだけ。第五番目の子供も同じくÞe fifte wreiunge. 第六番目の子供もÞe Seste bacbitunge. 第七番目の子供はÞe Seoueðe upbrud oðer scarnunge. 第八番目は‘ suspitio ’である。その子供は,‘ Þe eahtuð is suspitio. þ is misortrownge bi mon oðer bi wnmmon... þ urh nið ȝ þurh onde. ’ と説かれている。‘ Þe neddre of attrionde ’ の中では最も多く，約150～60語が使われている。その説教の文章を要約すると，人を根拠無くして疑ってかかることを言う，そして人を害しようと考え，彼女の言う事，する事には ‘ falsdom ’ があり，神はそれを大いに禁じている。外見上邪悪そうに見えても善い事もあるので我々はしばしば彼女のあれこれ為したり言ったりする事にだまされ易い，と説く，第九番目，説教者は始めに七匹の子供と言っていたが，の子として ‘ sawunge of unsibsumnesse of wreaððe ȝ of descorde. ’ ここではその主題の後に ‘ þeo þe saweð þis deofles sed: ha is of godd amanset. ’ と説いているだけである。第十番目の子は ‘ luðer stilðe. ’ である。そこの説教は，‘ Þe teoheðe is luðer stilðe. þe deofles silence. þ... for hare teames beoð imengt ofte to gederes. ’ 要旨は，悪意のある沈黙は悪魔の沈黙であって，悪意のために人に対して語りかけない，これも亦怒りから来ていると，説いている。この第二の悪の獣は第一のその説教と比べると ‘ Ingratitudo ’ と ‘ suspitio ’ が詳しいが他は上述した如く簡潔な説教で済ませている。第一の悪の獣の場合，約700語で説教しているのに対し，ここでは大体その半分位いである。子供の数は何れも十匹である。

7.

第三番目に取り挙げられる荒野の悪い獣は ‘ Þe Vnicorne of wreaððe ’ である。それに就いて説教者は Þe Vnicorne of wreaððe þe bereð on his nease þe þorn þ... haueð six hwelpes. ’ と始めにその特徴とそれが有っている子供の数を述べている。第一の子供は，

‘ þe earste is chast oðer strif. ’と極めて簡潔，手短かに説いただけである。次に第二番目の子供に就いて，‘ Þe oðer is wodschipe... wel ut of hire witte. ’，怒り狂った時の表情の凄さ，恐ろしさに就いて語っていよう。第三番目の子供は，‘ Þe þridde is schentful up brud. ’と述べているのみである。次の第四番目の子供に就いても，‘ Þe feorðe is wariunge ’とだけ言っている。第五番目に就いても同じく，‘ Þe fifte is dunt. ’とのみ言い，第六番目の子供に，Þe seste is wil þ him uuel tidde... oðer on his ahte. ’，自分又は友人に悪い事を起こしてやろうとする意志，始めに六匹の子供があると言っておき乍ら，第七番目の子供を挙げている。そこの説教文は，‘ Þe seoueðe hwelp is don... þeos is homicide ȝ morðre of hire seoluen. ’と説かれる（ここの文章は内容がよく分からなかったので今回は省く）。以上が第三番目に挙げられた荒野の野獣についての説教である。説教は第四番目の荒野の獣に入る。

８．

第４番目に取り挙げられる荒野の獣は‘ Þe Beore of heui slawðe. ’である，これについて，‘ Þe Beore of heui slawðe haueð þeose hwelpes. ’と言って以下の如くその子供の各々に就いて説教をしている。その最初は Torpor is　þe forme. þ is wlech heorte... o lei i lune of ure lauerd. ’，神の愛の恩寵の中に輝き発する全ての物に対しての物臭な心を第一に取り挙げている。第二番目は‘ pusillanimitas ’で，その説教は‘ þ is to poure heorte ȝ to each mid... nawt of hire strengðe. ’つまり臆病心，自分の力に頼らず過剰に神の助けに頼る心と説く。第三番目の子供は‘ cordis grauitas ’であると言う。そして‘ þis haueð hwa se wurcheð god ȝ... ȝ mid an heui heorte. ’，善行を行いながらも死ぬ程に又重々しい気持でやる人と言っている。第四番目の子供は‘ ydelnesse ’と言う。‘ hwa se stut mid alle. ’何もしないでただじっとしている人。第五番目の子供は‘ Þe fifte is heorie grucchunge. ’。第六番目の子供は‘ Þe seste is a dead sorhe for lure of... bute for sunne ane. ’世俗的価値のものを失ったり，神に対する感謝の気持の無さに対して死ぬ程の悲しみをもちながら罪に対しては，その様ではない（？）。第七番目の子供は，‘ Þe Seoueðe is ȝemelesschipe oðer to seggen oðer... þ haueð to ȝ emen. ’具体的，個別的に日常度々ある具体的な行動を列挙している。第八番目の子供は，‘ Þe eahtuðe is unhope. ’と言った直後に，‘ þis leaste beore hwelp is grimmest of alle. ’と説いてその次に‘ for hit to cheowe ð ȝ tofret godes milde milce ȝ... ȝ his unimete grace. ’と言ってその訳を比喩的に聞き手にとって理解し易い表現で以って解説している。以上が第四番目に取り挙げられた荒野に住む野獣の子供達に喩えての説教である。分量的には第三番のそれと略々同じ量の説教である。

９．

第五番目に挙げられる荒野の野獣は次の様に説かれる。その最初は‘ Þe Vox of ȝisceunge haueð þeose hwelpes. ’と言って，その次にその子供を具体的に列挙している。‘ Triccherie ȝ gile. Þeofðe Reaflac. wite. ȝ herrure strengðe. false witnesse oðer að. dearne symonie Gauel. Oker. festschipe. prinschipe of ȝeoue oðer of lane. þis is icluht heorte. vnþeaw gode laðest. þe ȝef us al him seoluen. Monslaht oðerhwile. Þis unþeaw is to uox for moni reisun ieuenet. Twa ich chulle seggen. ’狐に喩えての説教の語り口は，この悪徳が嘘，騙し，世俗的利益への貪欲さ等にその特徴があるから，狐の有つその習性，動物的特徴への人々の理解，了解を基本にして悪徳の分析をしている。‘ Þis unþeaw is to uox... is í ȝ isceunge of worltlich biȝete. ’と‘ An oðer. þe Vox awurie ð al a... on him seolf bute a monnes dale. ’その結論として‘ Al þ mon wilneð mare oðer wummon... al is ȝisceunge ȝ rote of deadlich sunne. ’，‘ þ is riht religiun þ euch efter his stat... of ahte. of alle hire þinges. ’貪欲さとか，必要以上に欲しがる欲望からくる数多くの悪徳は全て自分の立場に則った以上のものへの欲情がその元凶である。‘ Euch efter his stat. ’に最も簡潔に要約され，その言葉の理解，把握に際し説教者は締めくくりのところで，‘ for þ word is ifeðeret... ’hwenne come ich to ende？ ’と言って注意を促している

10．

テキストの中では一応大きい区分の書き方になっているので，この小論に於いてもそれに従って区分別けを行った。Þe Suhe of ȝiuernesse haueð gris þus inempnet... leste ȝe ham feden. ’がこの区分の全体である。内容的には挙げられた七つの罪悪中では最も簡潔に説教が終了している。‘ Þe Suhe of ȝiuernesse haueð gris þus inempnet. ’その説教意図は何回も前後の文脈から考えたが分からなかった。一応この小論では以下の様に書かれていると考えられる訳文に留めておきたい。‘ ȝiuernesse ’の豚は次の様にその若い豚（gris）は名付けられる。第一匹目は‘ to earliche ’，早過ぎると呼ばれ，第二匹目は‘ to esteliche ’，優し過ぎと呼ばれ，第三匹目は‘ to　frechliche ’，貪欲過ぎると呼ば

れ，第四匹目は‘ to muche ’多過ぎる，と呼ばれ，第五匹目は‘ 余りにもしばしば ’と呼ばれ，これらは食事の時よりは飲む時に育てられる。ここの説教では‘ to～ ’のみが示されていて悪徳行為が示されていないが，聞き手はそれで以って十分了解されるからと解しておきたい。筆者には推察が出来なかったので不十分な分析でこの小論では終えざるを得ない。

11.

最後の七番目に挙げられる罪悪は‘ leccherie ’つまり‘ Þe Scorpiun of leccherie. þ is of galnesse. haueð swucche cundles. ’と初めに言った後にその子供達に就いて略々以下の様に説いている。先ず初めに‘ þ in a wel itohe muð... ȝ sulen cleane heorten. ’と説く。ここにはその名前を言ったり，知っている事だけでも相手の十分に躾られた耳とか清らかな心を傷つけたりする事がある程人の心を惑わせる力をもっている事を述べてその恐ろしさを説く。次の段階では，人々は特に罪悪性の高い誘惑力をもつ子供を具体的に説いている。‘ þeo þah me mei nempnin wel. ... is to monie al to cuðe. ’それらは巧くたとえ名を挙げて言ったとしてもより罪悪性が他の子供よりは多いのです，と言ってその名を口にする事だけですら罪悪性を一層強くもつものである。この様に説いてからその具体的誘惑の場合を挙げている。そしてその全ては多くの人々にとって知っていて然るべきものである，と説教する。そして説教はそれら誘惑がどの様にして人の心を惑わせるか，その働らきのメカニズムを説く。その文章は以下の如く語られる。‘ Horedom. Eawbruche. Meiðlure ȝ Incest. þ... to openin þe inȝong ȝ leoten in sunne. ’この説教の文章を意味の上からその構成をみてみると，初めにその誘惑の罪悪名が挙げられる。次に‘ þ is bituhe sibbe fleschliche oðer gasteliche. ’とそれに加えて‘ þ is o feole idealot. ful wil to þ fulðe wið skiles ȝettunge ’の２つの説教文が関係代名詞によって付加的表現形式に拠って挿入的に語られるが，‘ wið skiles ȝettunge ’，文章に比重があり，以下はその文章の具体的，分析的説明の説教文となる。このパッセツジの構文上の構成は‘ Horedom. Eawbruche. Meiðlure. ȝ Incest... helpen oþre þiderward. ’が主要構文であり，アウトラインを成していて，‘ beo weote ȝ witnesse þrof. ’は挿入的に語られ，その主要構文に対して具体的，分析的に説かれる文章群はそれ以下の文章‘ hunti þrefter wið wohunge wi ð toggunge... to openin þe inȝong ȝ leoten in sunne. ’がその働きをしている。従ってこの説教に於いて力点が置かれているところは‘ wið wohunge. wið toggunge. oðer... Cos. Vnhende grapunge ’の文章であり，説教者は‘ wið skiles ȝettunge. ’の語句のもつ意味を説教のポイント又は基調としている。‘ þ mei beon heaued sunne... to openin þe inȝong ȝ leoten in sunne. ’の文章は，それら基調語に対する付加説明的機能をもった説教文であって説教の力点の面からの機能は補足，追加的機能をもった文章の働きに終っていよう。つまり人をどの様にして，どんなものを通して誘惑されるか，その具体的場合を網羅的に挙げて説教している。‘ forte cumen i swnch keast ȝ... to open þe inȝong ȝ leoten in sunne. ’はその様な誘惑の子供は更に深い罪悪に落ちてしまわない為には最初のその様な先行する悪の誘惑を避ける事が大切である，と説いてこの‘ Þe Scorpiun of leccherie ’の説教のまとめとしている。‘ Ah sari mei ha beon þe... þe í swuch beoð ifallen. ’ここのパッセツジの説教は一旦その様な誘惑の子供を自分の心の中に育てていった場合とそうならずにいる場合とに各々どうしたら良いかに就いて，その処置の仕方に関しての説教文である。従ってここの説教文は命令文が多く語られ且つ簡潔に説教が具体的内容をもって語られ，実践的説教の文章が用いられている。その次のパラグラフは‘ INoh is etscene hwi ich habbe i euenet... ant swiðe flih þer frommard ear þu beo iattret. ’ここでは何故説教者が‘ galnesse ’を‘ Scorpiun ’に喩えたのか，その視点からみての‘ galnesse ’の特徴を説く説教文である。初めに作者はこの‘ galnesse ’が如何に狡猾で巧み且つずる賢く欺満に満ち々々ている事を‘ INoh is etscene hwi ich habbe... þ is hwi galnesse beo to scorpiun ieuenet. ’と言う。続いて以下の様に述べている‘ Ah lo her þe skile þrof sutel ȝ etscene. ’と初めにその狡猾な技に就いて言ってそれ以下でその具体的分析を以下の様にしている。‘ Scorpiun is a cunnes wurm. þe... þe teil ȝ te attri ende is þe eche pine of helle. ’その内容の説教の中の始めから‘ ... hwil hit least þe þuncheð swiðe swote. ’迄はこの説教の前半部であるが内容的にはその‘ Scorpiun ’の特質が美しい女性の顔の比喩を用いて巧みに説かれていて，そしてこの後には毒の刺か歯をもった爬虫類，毒蛇が隠されている，つまり‘ he leat to chepinge ȝ to ench gederunge... ȝ te attri ende is þe eche pine of helle. ’の後半の説教の話題の方がより描写的で細かく実感的に把え易い表現と言える。その直後に‘ Ant nis he fol chapmon þe... bute þ heaued ane？ ’と日常生活での体験に基づく話題を提出しその体験上の常識で以って自分の説教の内容の正しさを実証している。そしてその様な場合に如何に行動したら良いのか，その身の処し方を次の様な喩えを使って教えてい

る‘ for þi hwen þe deouel beodeð forð þis beast... ant swi ðe flih þer frommard ear þu beo iattret. ’

12.

この段落での説教は，聞き手である三人の修道女（見習）が修道の生活に入ろうとしている乙女達に向かってその修道の生活の日々の中で出合うであろう様々な障害，災いに対しての説教と考えられる。その様な立場に今居る聞き手に対して説教者は始めに次の様な言葉でその説教を始めている。‘ Þvs mine leoue sustren í þe wildernesse þer ȝe gaðȝ... to an of ham seouene: oðer to hare streones. ’ と言う比喩の表現で以ってこの段落での説教は始まる。そしてその直後に，具体的に‘ þulliche beastes. þulliche wurmes ’ とは何んなもの，行為を言うのか，そしてその具体的行為とそれが何の様に罪と関係しているのか，説教者はそれぞれのその様な災いは全て，上記の七つの原罪に繋がっているとしている（ne nat ich na sunne þ... : oðer to hare streones.）その最大の原罪の根源は‘ Vnsteaðeluest bileaue aȝein godes lare ’ であり，それは一種の‘ prude inobedience ’ がその根源にあるからで，具体的にはどんな行為を指すか，‘ Herto falleð sygaldren... oðer ei oþer sacrement. ’ 等を挙げる。人々はそれらをそうだと知って行うならば‘ nis hit te spece of prude þ... ȝef me wat hwuch sunne hit is. ’ であり，それらをそうだと知らないで行うならば，‘ ȝef me hit nat nawt ’... þ ich slaw ðe cleopede. ’ である，と説く，この‘ slawðe ’ は七つの原罪の一つであり，作者が七つの各々の原罪に就いて説教を終えた一つである。次の説教も同じ様な調子で語られる。説教の語り口は具体的にその様に怠慢をその原因とする罪悪的行為を具体的に示して後にそれが全て怠慢に起因して起こっている事を説くと言った説教になっている。初めに‘ Þe ne warneð oðer of his uuel oðer of his biȝete ’ がその具体的罪悪行為として挙がる。それに対して‘ Nis hit slaw ȝemeles oðer attri onde？ ’ と説く。次に‘ teoheði mís. edhalden cwide. fundles oðer lane oðer þerwið mis fearen. ’ に対して，‘ Nis hit spece of ȝisceunge. ȝ anes cunnes þeofðe？ ’ と厳しい。‘ Edhalden oðres hure ouer his rihte terme ’ に対しては，Nis hit strong reaflac hwa se ȝelden hit mei þe is under ȝisceunge？と説き，‘ ȝef me ȝemeð wnrse ei þing ileanet. oðer bitaht to witene. þen he wene þe ah hit. ’ に対しては‘ Nis hit oðer triccherie. oðer ȝemeles of slawð e？ ’ 又‘ Alswa is dusi heast oðer folliche ipliht trowðe. longe beon unbischpet. ’‘ falsliche gan to schrift. oðer to longe abiden. ne teache pater noster godchild ne Credo. ’ の行為も同じ事（Alswa）とされる。そして‘ Þeos ȝ alle þulliche beoð ilead to slawðe. þ is þe feorðe moder of þe seoue sunnen ’ と言ってそれらの罪悪は全て一切‘ slaw ðe ’ 怠惰，七大原罪の一に基づくものであると説く。その表現が挿入文であるかの様に説教者は更に追加して，‘ Þe dronc drunch oðer ei þing dude ... oðer þ istreonede schulde forwurðen. ’ に対しては‘ Nis þis strong monslaht of galnesse awakenet. ’ とその罪悪の根元に淫らな心があることを表している。説教は極めて具体的になされ，その原因は怠惰な心に在る事を説得的口調によって簡潔に説いている。そしてこの段落，七大原罪の斉す人間への罪悪性の力は‘ Of þeose seoue þeastes ȝ of hare streones i wildernesse of anlich lif, is iseid herto. þe alle þe forfearinde fondið to fordonne. ’ と言って全てを殺害する力をもっている事，その恐ろしさを説く。その具体的説得はそれに続いて‘ Þe liun of prude sleað alle þe prude. alle þe beoð hehe ð ouerhohe iheortet ’，‘ Þe attri neddre : þe ontfule ȝ te luðere iþonket. ’，‘ Wreaðfule : þe Vnicorne. ’，‘ Alswa of þe o þre o rawe. ’. そして最後に‘ to godd ha beoð isleine, ... þe meoster þe him to falleð. ’ と言ってまとめているが，ここではその七大原罪が全て一人の悪魔‘ feond ’ に帰し，彼に仕え，彼に対して生きていて，彼の手の中に在って，そのなす悪業は全て彼に帰する，と言って悪魔に対して如何にそれらが関わっているかを具体的，比喩的表現で以って説得的に説いている。

13.

上記の小論を更に以下に同じ構想，説教の流れ，筋立て，論証の過程重視の視点より纏める。

説教の始まりは全般的概括を簡潔に述べている（99：19−100：５）。冒頭の‘ Þe inre fondunge is twaualt ... as licunge i godes luue ȝ mislicunge for sunne ’ は先ず，内的誘惑も外的誘惑も同じ型を成して，その理由を概括している。次の節，バッセジではそこから愈々内的誘惑に関しての本論に入る。そこでは内的誘惑が外的それと同じ様にと前置きして肉体的誘惑と精神的，知的，心的誘惑の２通りがあり，肉体的誘惑の具体例を挙げている。そしてそれらは全て七大原罪とその子供達であると説く。そしてそれを足の外傷‘ fot wunde ’ に喩える。次に本論の知的，精神的，心的誘惑の説教に入る。そこでの説教は外的誘惑の様に具体的説教には内容は成っていなくて外的誘惑よりは恐ろしいものであり，気づきにくい，気づいた時はもう重傷の段階又は死に至る直前にあるので告白，懺悔する

機会を失う危険性が高い，と言ってその性質と恐ろしい理由を説く。以上が内的誘惑の概括，序論的説教の内容と言える。

次に説教はその七大原罪が聖なる人々に対してどの様にして働きかけてくるか，ここでは拉典語の原文を引用してそれを解説する形をとって分かり易く説教をしている。聖なる男女がイエルサレムに旅するその旅程に於いて七大原罪がどの様に彼らに近づき，誘惑してくるのか，その速さを山頂に住む鷲に喩えて我々を追って来て襲い，秘かに知らぬ間に我々を殺そうとしている様子を荒野に待ち伏せする彼らに喩えている。彼らは我々の敵‘Vre wiðeriwines’と言い，悪魔‘feond’，世間‘worlt’，我々自身の肉‘ure ahne flesch’の三つに分類する。それ等が各々どの様に何時襲って来るかは軽々しくは分かるものではなく，相互に助け合っている，と解説した後に，それでも各々はそれぞれ役割の分担を有しているとした後に‘feond’‘flesch’‘worlt’らが何の方向に人を誘惑するかを具体的に説く。ここでは悪魔を，その罪の名前を一つ一つ上げて，誘惑する方向を‘to～’の表現で簡潔に示している。‘þe flesch’に就いては‘Þe flesch sput proprement toward swetnesse. eise. ȝ softnesse.’，‘þe world’に就いては，‘Þe world bit mon ȝiscin worldes weole ȝ... to luuien, a schadewe.’と概括的表現を使っている。肉体的欲求は安楽さ，快楽等を求め，世俗的欲求は影‘schadewe’に過ぎない他人の持って下らなくて俗っぽい物とか価値をむやみに欲しがる欲求であるとしている。‘hul’丘の喩えは高い生活‘heh lif’を示し，そこでは害敵が最も強いことがしばしばある。この荒野の喩えはそこが尼僧が住むのに好適な場所としている。その訳は荒野に住む野生の獣に尼僧を喩えていて，両者共人々の接近するのを避ける習性と習性がある。その様な獣も人も神にとって，その野性的肉が最も好まれ，甘美であるから（for of all flesches is wilde deores fleschs leouest ȝ swetest），と纏めている。そして最後に‘Bi þis wildernesse wende ure lauerdes folc ... Her beoð nu o rawe itald þe seouen heaued sunnen.’でこの段落は終る（100：6－101：17）。その最後の所で‘尼僧達を荒野を旅してイエルサレムに向かう旅人に見立て，その途中では荒野に邪悪な人間の野獣らが住んでいるからと述べ，七大原罪を野性の獣に喩える。傲慢さば‘Lium of prude’，怒りば‘Vnicorn of wreaððe.’の様に略々一定の表現形式を使っている。

第一に登場する七大原罪は傲慢の獅子‘Þe liun of prude’である。この原罪と第７番目に登場する淫乱の蠍（さそり）‘Þe Scorpiun of leccherie’は約２頁分，700語で語られて最大である。通常は約１頁分，350語かその半分位いである。内容的にみて説教者がその原罪に就いての関心の深さ，罪の重さ，要注意の度合が高い事を示していると考えられる。この獣に喩えての七大原罪の説教の英語は難解の文章が多く，前後の文脈で推測して読み通してみたが不明，不確かな箇所は部分的には解消されていない。一つ一つの原罪にはその子供‘hwelpes’が居て，その子供に喩えた罪を解説する形に多くはなっている。‘Þe liun of prude haueð swiðe monie hwelpes. ant ich chulle nempni summe.’（この原罪には非常に多くの子供達がいるのでその中の幾つかについてその名前を挙げて行こう）で始まる。最初に‘Vana gloria’虚栄心を挙げてそれに就いてやや長め然し常識レヴェルの説教があり，続いて‘indignatio’怒りに就いては具体的に一つの事例を取り挙げて説き，‘ypocresis’偽善についてば‘þe makeð hire betere þen ha is.’，‘presumtio’貪欲に就いては常識的説教，‘inobedience’不服従では具体的事例を列挙，‘loquacite’おしゃべり，多弁でも具体的事例を列挙するが，単なる多弁ではなく嘘をつく，自慢話をする，人の悪口を言う等悪意のこもった多弁の事例が挙げられる。‘Blasphemie’冒瀆は一般的解説的説教，‘inpatience’忍耐の無さも同様，‘contumace’頑固さも同じく簡潔，要約的説教文，‘contentio’闘争に於いては勝利者の傲慢さ，その高圧的要求，軽蔑的態度が簡潔，具体的単語を使用して表現される。ここまで合計10の‘prude’の子供がその様な語り口で説教される（101：18－102：18）。

13の試論は１から12までの要約として書く予定であるが予定原稿枚数に達したので中途であるがこの度の小論はここで打ち切りとしたい。13の続きは次号に掲載を予定している。

使用したテキストは前号，前々号と同じ，The English Text of the Ancrene Riwle. Ancrene Wisse. edited from Ms. Corpus Christi College Cambridge 402 by J. R. R. Tolkien である。（　：　）内に示した数字は上記テキストの頁：行の数字である。

Þe ínre fondunge is twaualt. alswa as is þe uttre. for þe uttre is inaduersite ȝ i prosperite. licunge þe limpeð to sunne. þis ich segge for þi þ sum licunge is ȝ sum mislicunge þe ofear neð muche mede. as licunge i godes luue. ȝ mislicunge for sunne. Nu as ich segge þe ínre fondunge is twaualt. flesch lich ȝ gastelich. fleschlich: as of leccherie. of glutunie. of slaw ðe. Gastelich: as of prude. of onde. ȝ of wreaððe. alswa of ȝiscunge. þus beoð þe inre fondunges þe seouen heaued sunnen. ȝ hare fule cundles. flesches fondunge mei beon ieuenet to fot wunde. Gastelich fondunge þ is mare dred of. mei beon for þe peril icleopet breost wunde. ah us þuncheð greattre flesliche temptatiuns for þi þ heo beoð eð fele. Þe oþre þah we habben ham: ofte nute we hit nawt. ȝ beoð þah greate ȝ gris liche i godes ehe. ȝ beoð muchel for þí to drede þe mare. for þe oþre þe me felcð wel. secheð leche ȝ salue. Þe gasteliche hurtes ne þuncheð nawt sare. ne ne saluið ham wið schrift ne wið penitence. ȝ draheð to eche deað ear me least wene.

Hali men ȝ wummen beoð of alle fondunges swiðest ofte itemptet. ȝ ham to goderheale. for þurh þe feht toȝei nes ham: ha biȝeoteð þe blisfule kempene crune. lo þah hu ha meaneð ham i Ieremie. Persecutores nostri uelociores aquilis celi. super montes persecuti sunt nos. in deserto insidi ati sunt nobis. þ is. Vre wiðeriwines swiftre þen earnes up o þe hulles. ha clumben efter us. ȝ þer fuhten wið us. ȝ ȝet i þe wildernesse ha spieden us to sleanne. Vre wiðeriwines beoð þreo. þe feond. þe worlt. ure ahne flesch as ich ear seide. lihtliche ne mei me nawt oðerhwile icnawen hwuch of þeos þreo him weorreð. for euch helpeð oþer. þah þe feond proprement eggeð to atternesse. as to prude. to ouerhohe. to onde ȝ to wreaððe. ȝ to hare attri cundles þe her efter beoð inempnet. Þe flesch sput proprement toward swetnes se. eise ȝ softnesse. Þe world bit mon ȝiscin worldes weole ȝ wurðschipe. ȝ oþre swucche giuegauen þe bidweolieð cang men to luuien a schadewe. þeos wiðeriwines hit seið folhið us on hulles. ȝ weitið i wildernesse hu ha us

(99 : 19–32)

mahen hearmín. Hul þ is heh lif. þer þe deoflesasawz ofte beoð strengest. Wildernesse is anlich lif of ancre wu nunge. for alswa as i wildernes beoð alle wilde beastes ant nulleð nawt þolien monne nahunge. ah fleoð hwen ha heom ihéreð: alswa schulen ancres ouer alle oþre wum men beo wilde o þisse wise. ȝ þenne beoð ha ouer oþre leo ue to ure lauerd. ȝ swetest him þuncheð ham. for of all fles ches is wilde deores fleschs leouest ȝ swetest. Bi þis wil dernesse wende ure lauerdes folc as exode teleð toward te eadi lond of ierusalem þ he ham hefde bihaten. Ant ȝe míne leoue sustren wendeð bi þe ilke wei toward te hehe ierusalem. þe kinedom þ he haueð bihaten his icorene. gað þah ful warliche. for i þis wildernesse beoð uuele beastes monie. Líun of prude. Neddre of attri onde. Vnicorne of wreaððe. Beore of dead slawðe. Vox of ȝisceunge. Suhe of ȝiuernesse. Scorpi un wið þe teil of stinginde leccherie. þ is galnesse. Her beoð nu o rawe itald þe seouen heaued sunnen.

Þe líun of prude haueð swiðe monie hwelpes. ant ich chulle nempni summe. Vana gloria. þ is hwa se let wel of ei þing þ ha deð oðer seið. oðer haueð wlite oðer wit. god acoíntance. oðer word mare þen an oþer. Cun oðer meistrie. ȝ hire wil forðre. ant hwet is wlite wurð her: gold ring i suhe nease. acointance i religiun. wa deð hit ofte. al is uana gloria. þe let eawiht wel of. ȝ walde habben word þrof. ȝ is wel ipaiet ȝef ha is ipreiset. mispaiet ȝef ha nis itald swuch as ha walde. An oþer is indignatio. þ is þe þuncheð hokerlich of ei þing þ ha sið bi oðer oþer hereð. ȝ forhoheð chastiement. oþer ei lahres lare. Þe þrid de hwelp is ypocresis. þe makeð hire betere þen ha is. Þe feor ðe is presumtio. Þe nímeð mare on hond þen ha mei ouercu men. oðer entremeteð hire of þíng þ to hire ne falleð oðer is to ouertrusti up o godes grace. oðer on hire seoluen. to bald up on ei mon þ is fleschlich as heo is ȝ mei beon

(101 : 1 –33)

itemptet. Þe fifte hwelp hatte inobedience. nawt ane þe ne buheð. oðer grucchinde deð. oðer targeð to longe. þet child þe ne buheð ealdren. Vnderling his prelat. parosch ien his preost. Meiden hire dame. Euch lahre his herre. Þe seste is loquacite. þe fedeð þis hwelp þe is of muche speche. ȝelpeð. demeð oþre. liheð oðerhwile. gabbeð. upbreideð. chí deð. fikeleð. stureð lahtre. Þe Seoueðe is blasphemie. þis hwelpes nurrice is. þe swereð greate aþes oðer bitterliche curseð. oðer misseið bi godd oðer bi his halhen. for ei þing þ he þoleð. sið oðer hereð. Þe eahtuðe is ínpatience. þis hwelp fet þe nis þolemod aȝein alle wohes ȝ in alle uue les. Þe Niheðe is contumace. ant þis fet hwa se is anewil i þing þ ha haueð undernume to donne. beo hit god beo hit uuel. þ na wisure read ne mei bringen hire ut of hire riote. þe teoheðe is Contentio. þ is strif to ouercumen þ te oþer þunche underneoðen awarpen ȝ crauant. ant heo me⟨i⟩stre of þe mot. ȝ crenge ase champíun þe haueð biȝete þe place. I þis unþeaw is upbrud. ȝ edwitunge of al þ uuel þ ha mei bi þe oðer ofþenchen. ant eauer se hit biteð bíttru re: se hire likeð betere. þah hit were of þing þe wes biuore ȝare amendet. Her imong beoð oðerhwiles nawt ane bittre wordes: ah beoð fule stinkinde scheomelese ȝ schent fule. sum chearre mid great sware. monie ȝ prude wordes wið warínesses ȝ bileasunges. Her to falleð euenunge of ham seolf. of hare cun. of sahe oðer of dede. Þis is among nun nen. ȝ gað wið swuch muð seoððen ear schrift ham habbe iweschen to herie godd wið loftsong. oðer biddeð him pri uee bonen. Me þinges amansede nuten ha þ hare song ant hare bonen to godd stinkeð fulre to him ȝ to alle his halh en: þen ei rotet dogge. Þe ealleofte hwelp is ifed wið supersti ciuns. wið semblanz ȝ wið sínes. as beoren on heh þ heaued. crenge wið swire. lokín o siden. bihalden on hokere. winche

(102 : 1 –32)

mid ehe. binde seode mid te muð. wið hond oðer wið hea ued makie scuter signe. warpe schonke ouer schench. sitten oðer gan stif as ha istaket wére. luue lokin o mon. speo ken as an ínnocent. ȝ wlispín for þen anes. Her to falleð of ueil of heaued clað. of euch oðer clað. to ouegart ace

munge oðer in heowunge. oðer ipinchunge. gurdlesant gurdunge o dameiseles wise. scleaterunge mid smirles fule fluðrunges. heowin hér. litien leor. pinchin bruhen oðer bencín ham uppart wið wéte fingres. Monie oþre þer beoð þe cumeð of weole of wunne. of heh cun. of fei er clað. of wit. of wlite. of strengðe. Of heh cun waxeð prude. ȝ of hali þeawes: monie ma hwelpes þen ich habbe inempnet: haueð þe líun of prude. ah abute þeose studieð wel swiðe. for ich ga lihtliche ouer. ne do bute nempni ham ah ȝe eauer ihwer se ich ga swiðere uorð: leaueð þer lengest. for þer ich feðeri on a word téne oðer tweolue. Hwa se eauer haueð eani unþeaw of þeo þe ich her nempnede. oðer ham iliche: ha haueð prude sikerliche hu se eauer hire curtel beo ischapet oðer iheowet. heo is þe líunes make þ ich habbe ispeken of. ȝ fet hire wode hwelpes

Þe neddre of attri onde ⁋ .inwið hire breoste. haueð seoue hwelpes. Ingratitudo. þis cundel bret hwa se nis icnawen goddede. ah teleð lutel þrof. oðer forȝet mid alle. goddede ich segge nawt ane þ ⟨mon⟩ deð him: ah þ godd deð him. oðer haueð idon him. oðer him oðer hire. mare þen ha understont ȝef ha hire wel biþohte. Of þis unþeaw me nimeð to ⟨lutel⟩ ȝeme. ȝ is þah of alle an laðest godd ȝ meast aȝeín his grace. Þe oðer cundel is Rancor siue odíum. þ is heatun ge oðer great heorte. Þe bret hit i breoste: al is attri to godd þ he eauer wurcheð. Þe þridde cundel is ofþun chunge of oþres god. Þe feorðe: gleadschipe of his uuel. Þe fifte wreiunge. Þe Seste bacbitunge. Þe Seoueðe up

(103 : 1 −33)

brud oðer scarnunge. Þe eahtuðe is suspitio. þ is mis ortrowunge bi mon oðer bi wummon wið uten witer tacne. þenchen. þis semblant ha makeð. þis ha seið oðer deð me forte gremien. hokerín oðer hearmin. ȝ þ hwen þe oþer neauer þideward ne þencheð. Herto falleð fals dom þ godd forbeot swiðe. as þenchen oðer seggen. ȝe ne luueð ha me nawt. Herof ha wreide me. lo nu ha speokeð of me þe twa. þe þreo. oðer þe ma þe sitteð togederes. swuch ha is ȝ swuch ȝ for uuel ha hit dude. Iþulli þoht we beoð ofte bichearret. for ofte is god þ þuncheð uuel. ȝ for þí beoð aldei monnes domes false. Herto limpeð alswa luðe re neowe fundles ȝ leasunges ladliche þurh nið ȝ þurh onde. Þe Niheðe cundel is sawunge of unsibsumnesse of wreaððe ȝ of descorde. þeo þe saweð þis deofles sed: ha is of godd amanset. Þe teoheðe is luðer stilðe. þe deofles silence. þ te an nule for onde speoken o þe oþer. ant þis spece is al swa cundel of wreaððe. for hare teames beoð imengt ofte to gederes. Hwer as ei of þeos wes: þer wes þe cundel oðer þe alde moder of þe attri neddre of onde.

Þe Vnicorne of wreaððe þe bereð on his nease þe þorn þ he asneaseð wið al þ he areacheð: haueð six hwel pes. Þe earste is chast oðer strif. Þe oðer is wodschipe. Bihald te ehnen ȝ te neb hwen wod wreaððe is imunt. Bihald hire contenemenz. loke on hire lates. hercne huþe muð geað. ȝ tu maht demen hire wel ut of hire witte. Þe þridde is schentful upbrud. Þe feorðe is wariunge. Þe fifte is dunt. Þe seste is wil þ him uuel tidde. oðer on him seolf. oðer on his freond. oðer on his ahte. Þe seoueðe hwelp is. don for wreaððe mis. oðer leauen wel

to don. forgan mete oðer drunch. wreoken hi re wið teares ȝef ha elles ne mei. ȝ wið weariunges hire heaued spillen o grome. oðer on oþer wise hearmin

(104 : 1 −32)

hire i sawle ȝ i bodi baðe. þeos is homicide ȝ morðre of hire seoluen. Þe Beore of heuí slawðe haueð þeose hwelpes. Torpor is þe forme. þ is wlech heorte. vnlust to eni þíng. þe schulde leitin al o lei i luue of ure lauerd. Þe oþer is pusillanimitas. þ is to poure heorte ȝ to earh mid alle ei heh þing to underneomen in hope of godes help: ant i trust on his grace. nawt of hire strengðe. Þe þridde is cordis grauitas. þis haueð hwa se wurcheð god. ȝ deð hit tah mid a dead ȝ mid an heuí heorte. Þe feorðe is ydelnesse hwa se stut mid alle. Þe fifte is heorte grucchunge. Þe seste is a dead sorhe for lure of ei worltlich þing. oþer for ení unþonc bute for sunne ane. Þe Seoueðe is ȝemelesschi pe oðer to seggen oðer to don. oðer to biseon biuoren: oðer to þenchen efter. oðer to miswiten ení þing þ ha haueð to ȝemen. Þe eahtuðe is unhope. þis leaste beore hwelp is grimmest of alle. for hit to cheoweð ȝ tofret go des milde milce ȝ his muchele mearci. ȝ his unimete grace.

Þe Vox of ȝisceunge haueð þeose hwelpes. Triccherie. ȝ gile. Þeofðe. Reaflac. wite. ȝ herrure strengðe. false witnesse oðer að. dearne symonie. Gauel. Oker. festschipe. prinschipe of ȝeoue oðer of lane. þis is icluht heorte. vnþeaw gode laðest. þe ȝef us al him seoluen. Monslaht oðerhwile. Þis unþeaw is to uox for moni reisun ieuen et. Twa ich chulle seggen. Muche gile is i vox. ȝ swa is i ȝisceunge of worltlich biȝete. An oðer. þe Vox awuri eð al a floc þah he ne mahe buten an frechli che swolhen. Alswa ȝisceð aȝiscere þ tet moni þusent mahten bi flutten. ah þah his heorte berste. ne mei he bruken on him seolf bute a monnes dale. Al þ mon wilneð mare oðer wummon. þen ha mei rihtliche leade þ lif bi. euch efter þ ha is: al is ȝisceunge

(105 : 1 −31)

ȝ rote of deadlich sunne. þ is riht religiun þ euch efter his stat borhi ed tis frakele worlde se lutel se ha least mei. of mete. of clað. of ahte. of alle hire þinges. Notið þ ich segge. Euch efter his stat. for þ word is ifeðeret. ȝe mote makien þ wite ȝe i moni word muche strengðe. þenchen longe þerabuten. ȝ bi þ ilke an word under stonden monie þe limpeð þer to. for ȝef ich schulde writen al: hwenne come ich to ende ?

Þe Suhe of ȝiuernesse haueð gris þus inempnet. To earliche hatte þ an. þet oþer to esteliche. þ þridde to frechliche. þ feorðe hatte to muche. þ fifte to ofte. I drunch mare þen i mete beoð þeos gris iferhet. Ich speoke scheort liche of ham. for nam ich nawt ofdred mine leoue sustren

Þe Scorpiun of leccherie. þ is ⁋ .leste ȝe ham feden. of galnesse. haueð swucche cundles. þ in a wel itohe muð hare summes nome ne sit nawt forte nempnín. for þe nome ane mahte hurten alle wel itohene earen. ȝ sulen cleane heorten. þeo þah me mei nempnín wel: hwas nomen me icnaweð wel. ȝ beoð mare hearm is to monie al to cuðe. Horedom. Eawbruche. Meiðlure. ȝ Incest. þ is bituhe sibbe fleschliche oðer gasteliche. þ is o feole i

dealet. ful wil to þ fulðe wið skiles ȝettunge. helpen oþ re þiderward. beo weote ȝ witnesse þrof. hunti þrefter wið wohunge. wið toggunge. oðer wið eni tollunge. wið gigge lahtre. hore ehe. Eanie lihte lates. wið ȝeoue. wið tollinde word. oðer wið luue speche. Cos. Vnhende grap unge þ mei beon heaued sunne. luuíe tide oðer stude forte cumen i swuch keast. ȝ oþre foreridles þe me mot ne de forbuhen. þe i þe muchele fulðe nule fenniliche fallen. as seint austín seið. Omissis occasionibus que solent adi tum aperire peccatis: potest consciencia esse incolimis. þ is. hwa se

(106：1 −32)

wule hire inwit witen hal ȝ fére: ha mot fleon þe forerid les þe weren iwunet ofte to openín þe inȝong ȝ leoten ín sunne. Ich ne dear nempnín þe uncundeliche cund les of þis deofles scorpiun attri iteilet. Ah sari mei ha beon þe bute fere oðer wið: haueð swa ifed cundel of hire galnesse. þ ich ne mei speoken of for scheome ne ne dear for drede. leste sum leorni mare uuel þen ha con ȝ beo þrof itemptet. Ah þenche on hire ahne awea riede fundles ín hire galnesse. for hu se hit eauer is icwenct wakinde ȝ willes wið flesches licunge bute ane i wedlac: hit geað to deadlich sunne. I ȝuheðe me deð wundres. Culche hit i schrift ut utterliche as ha hit dude. þe feleð hire schuldi oðer ha is idemet þurh þ fule brune cwench: to þ eche brune of helle. Þe Scorpíu nes cundel þe ha bret in hire bosum: schake hit ut wið schrift ȝ wið deadbote slea. ȝe þe of swucches nute nawt. ne þurue ȝe nawt wundrin ow ne þenchen hwet ich meane. ah ȝeldeð graces godd þ ȝe swuch unclean nesse nabbeð ifondet. ȝ habbeð reowðe of ham þe i swuch beoð ifallen. INoh is etscene hwi ich habbe í euenet prude to líun: onde to neddre. ȝ of þeo alle þe oþre. wið ute þis leaste. þ is hwi galnesse beo to scorpi un ieuenet. Ah lo her þe skile þrof sutel ȝ etscene. Scorpiun is a cunnes wurm. þe haueð neb as me seið sumdeal ilich wummon: ȝ neddre is bihínden. Makeð fei er semblant. ȝ fikeð mid te heaueð: ȝ stingeð mid te teile. þis is leccherie. þis is þe deofles beast þ he leat to chepínge. ȝ to euch gederunge. ȝ chepeð forte sullen. ȝ biswikeð mo níe. þurh þ ha ne bihaldeð nawt bute þe feire neb: oðer þ feire heaued. þ heaued is þe biginnunge of galnesse sunne. ȝ te licunge hwil hit least þe þuncheð swiðe swote. Þe teil þ is þe ende þrof. is sar ofþunchunge. ȝ stingeð her wið atter of bitter bireowsunge. ȝ of deadbote. ant selili che mahen ha seggen þe þe teil swuch ifindeð. for þ atter ageað. ah ȝef hit ne suheð her: þe teil ȝ te attri ende is þe

(107：1 −35)

eche pine of helle. Ant nís he fol chapmon þe hwen he wule buggen hors oðer oxe. ȝef he nule bihalden bute þ heaued ane? for þi hwen þe deouel beodeð forð þis beast. beot hit to sullen ȝ bit ti sawle þeruore: he hut eauer þe teil: ȝ schaweð forð þe heaued. Ah þu ga al abuten. ȝ schaw þe ende forð mid al. hu þe teil stingeð. ant swiðe flih þer frommard ear þu beo iattret.

ÞVS mine leoue sustren i þe wildernesse þer ȝe gað: ín. wið godes folc toward ierusalemes lond. þ is þe riche of heouene: beoð þulliche beastes. þulliche wurmes. ne nat ich na sunne þ ne mei beon ilead oðer to an of ham seouene: oðer to hare streones. Vnsteaðeluest bileaue aȝein godes lare. nis hit te spece of prude inobedience? Herto falleð sygaldren. false teolunges. lefunge o swefne. o Nore. ȝ on alle wicchecreftes. Neomunge of husel in eaní heaued sunne. oðer ei oþer sacrement. nis hit te spece of prude þ ich cleopede presumptio. ȝef me wat hwuch sunne hit .is.

ȝef me hit nat nawt: þenne is hit ȝemeles under acci die. þ ich slawðe cleopede. Þe ne warneð oðer of his uuel oðer of his biȝete. Nis hit slaw ȝemeles oðer attri on de? teoheði mis. edhalden cwide. fundles oðer lane. oðer þerwið mis fearen. Nis hit spece of ȝisceunge. ȝ anes cunnes þeofðe? Edhalden oðres hure ouer his rihte terme Nis hit strong reaflac hwa se ȝelden hit mei þe is under ȝisceunge? ȝef me ȝemeð wurse ei þing ileanet. oðer bitaht to witene. þen he wene þe ah hit. Nis hit oðer triccherie. oðer ȝemeles of slawðe? Alswa is dusi heast oðer folliche ipliht trowðe. longe beon unbischpet. falsliche gan to schrift. oðer to longe abiden. ne teache pater noster godchild ne Credo. Þeos ȝ alle þulliche beoð ilead

to slawðe. þ is þe feorðe moder of þe seoue sunnen. Þe dronc drunch oðer ei þing dude. hwer þurh na child ne schulde beon on hire istreonet. oðer þ istreonede

(108：1 −35)

schulde forwurðen. Nis þis strong monslaht of galnes se awakenet? Alle sunnen sunderliche bi hare nomeli che nomen ne mahte namon rikenín. Ah i þeo þe ich habbe iseid: alle oþre beoð bilokene. Ant nis ich wene namon þe ne mei understonden him of his sunne no meliche under sum of þe ilke imeane þe beoð her iwri tene. Of þeose seoue beastes ȝ of hare streones i wilder nesse of anlich lif. is iseid herto. þe alle þe forfearinde fondið to fordonne. Þe liun of prude sleað alle þe prude. alle þe beoð hehe ȝ ouerhohe iheortet. Þe attri neddre: þe ontfule ȝ te luðere iþonket. Wreaðfule: þe Vnicorne. Alswa of þe oþre o rawe. to godd ha beoð isleíne. Ah ha libbeð to þe feond. ȝ beoð alle in his hond. ȝ seruið him in his curt euch of þe meoster þe him to falleð.

Þe prude beoð his bemeres. draheð wínd inward wið worltlich hereword. ȝ eft wið idel ȝelp puffeð hit ut ward as þe bemeres doð. makieð noise ȝ lud dream to schawin hare orhel. ah ȝef ha wel þohten of godes beme res of þe englene bemen þe schulen o fowr half þe world biuore þe grurefule dom grisliche blawen. Ariseð deade ariseð cumeð to drihtines dom forte beon idemet. þear na prud bemere ne schal beon iborhen. ȝef ha þohten þis wel: ha walden inohreaðe i þe deofles seruise dimluker bemín. Of þeose bemeres seið Ieremie. Onager solitarius in desiderio anime sue attraxit uentum amoris suí. Of þe wind drahinde ín for luue of hereword seið as ich seide.

Summe iuglurs beoð þe ne cunnen seruin of nan oþer gleo bute makien chéres. wrenche þe muð mis. schulen wið ehnen. Of þis meoster seruið þe unselí ontfule i þe deofles curt. to bringen o lahtre hare ondfu le lauerd. ȝef ei seið wel oðer deð wel: ne mahen ha nanes weis lokin þider wið riht ehe of god heorte. ah winkið o þ

(109：1 −32)